# 『死の床に横たわりて』における ダール・バンドレン
## ——アディとの関係を中心に

諏訪部　浩　一

William Faulkner研究は、1980年代の後半から90年代前半にかけて、フェミニズム批評の流入によって大きな影響を受けた。とりわけ、フォークナー作品の女性人物に関する認識は、この時期を境に決定的に変化したといっていい。70年代末、Ilse Dusoir Lindはフォークナーの女性人物について論じられるべきことはほとんどないように見えると韜晦気味に述べたが（89）、今日では女性人物に関する考察を無視して彼の作品を十分に論じることは難しいだろう。

フォークナーの小説において語り手としての地位を与えられた唯一の女性Addie Bundrenを擁する*As I Lay Dying*は、当然こうした潮流における例外ではなく、特にフレンチ・フェミニスト系の理論を援用する批評家は、言語に不信を抱くアディを＜象徴界＞（家父長的南部社会）への批判者として評価してきた。そうした議論の洗練は、彼女の言語への不信が、まさに彼女の「語り」によって表明されるという矛盾や限界を前景化するにまで至ったが、重要なことは、その矛盾や限界さえ、彼女が南部社会という象徴秩序のもとで主体としての位置を求めて苦闘する姿のリアルな発露として見做し得るということである。アディというヒロインは、特権的／絶対的／超越的な存在ではなく、他の人物と同じ現実を生きる１人の女性なのだ——そう見做すことで、我々のアディへの関心は単なる人物分析の地平を超えざるを得なくなったはずである。『死の床に横たわりて』研究はヒロインの考察に重点が置かれてきたが、もはやアディという人物を論じることは、フェミニズムの問題意識を内包しつつ、小説の問題として（再）認識されなくてはならないのである。

本稿ではこうした先行研究の流れを承け、小説のもう１人の主人公である

Darlについて論じたい。アディという人物が主人公の１人に過ぎない以上、もう１人の主人公に対する理解なくしては、アディを他者との関係性に開かれた小説の登場人物として十分に評価することも難しいはずだからである。

そこで以下の議論においては、まずダールこそがアディの超越的な存在たらんとする試みにおける「躓きの石」であることを確認する。次いで、彼の「母」との関係を考察する。そこでは、アディには自分が「母」ではなく「アディ」であることが問題であるのに対し、彼にとってはあくまで「母」としてのアディが問題であると論じる。「問題」を同一のものとして共有していない点で２人の関係は非対称的なものである。つまり、「弁証法的(dialectic)」に昇華されるようなものではなく、どこまでもすれ違う宿命にある。２人の主人公はMikhail Bakhtinの用語を使えば「対話的（dialogic)」な関係にあり、その対話性が小説を「ポリフォニック」にするのである。

以上の点を補強するために、本稿の後半はダールの共同体との関係を考察する。アディの「アディ」としての自己実現が、女性を「母」の枠に囲い込もうとする（南部）共同体の否定ないしは超越によって目指されるのに対し、彼女に存在を否認されたダールは、共同体に留まり、最終的にはスケープゴートとしての役割を受け入れることで、アディの超越性を相対化しつつ、「他者」を抑圧する共同体の論理を深いレヴェルで転覆させることになる。アディとダールの非対称的な関係に注目することで、『死の床』という小説が、それに続く*Sanctuary*や*Light in August*で顕著となる南部共同体という主題を準備し、30年代のフォークナーが南部共同体を批判的に描き出すための土台となったと本稿が示唆できることを期待したい。

ダールの存在が、アディの超越的な存在たらんとする試みにおける「躓きの石」であることを確認するには、彼の存在が、超越性の希求という彼女の欲望の起源に位置することを強調しておけばよいだろう。第二子の懐妊は、Cashとの母子関係を特権化していた彼女のロマンティシズムを破綻させるが、それは同時に、＜象徴界＞を超越しようという、いわば高次のロマンティックな動機を彼女に与えることになる。その目的のために彼女はダールを否認するのだが、いくら彼女が無視しても、彼は重要な登場人物であり続ける。より正確には、彼女が彼の存在を否認せざるを得ないがゆえに、彼はヒロインのロマンティシズムを相対化する重要な人物となるのだ。

Slavoj Žižekは次のように書いている。

> [T]he Real is the rock upon which every attempt at symbolization stumbles, the hard core which remains the same in all possible worlds (symbolic universes); but at the same time its status is thoroughly precarious; it is something that persists only as failed, missed, in a shadow, and dissolves itself as soon as we try to grasp it in its positive nature. . . . [T]his is precisely what defines the notion of traumatic event: a point of failure of symbolization, but at the same time never given in its positivity—it can be constructed only backwards, from its structural effects. All its effectivity lies in the distortions it produces in the symbolic universe of the subject: the traumatic event is ultimately just a fantasy-construct filling out a certain void in a symbolic structure and, as such, the retroactive effect of this structure. (169)

この一節は、＜象徴界＞を超越した地平に自己の主体性を据え、全てを「あるべきところ」に配置しようという、アディのロマンティックな企図におけるダールの位置を鮮やかに説明する。アディにとって第二子の懐妊はトラウマ的出来事である。それは、彼女が自らの母性を特権化し、キャッシュとの（＜想像界＞での）甘美な融合を果たすという目論見を頓挫させるばかりか、彼女がダールの存在を（＜象徴界＞で）「象徴化」しようという試みさえもあらかじめ挫いてしまう出来事として「発見」されるのだ。

アディが抱く言語への不信は、その「母性とはそれに対応する言葉を持たねばならなかった人間が発明した」（171）という言葉が示すように、本来は母性の神秘化のために働いていたが、ダールを懐妊し、母性の特権化が頓挫すると、それはダールというトラウマ的存在を「象徴化」できないという事実を先験的に乗り越えるように機能を変化させる。だが、超越的自己を希求する彼女の意識レヴェルではそれでよいとしても、彼女がそのためにダールを否認する／せざるを得ないという事実は残るし、その意味において、小説はダールを、彼女の「象徴化の失敗」の体現／地点として、つまり内面化され得ない「他者」（＜現実界＞）として前景化するのである。

夫に何も負っていたくないアディは、Jewelの代わりにDewey Dellを、キャッシュの代わりにVardamanをAnseに与え、自己の優位性を確認して死の床に横たわる。だが、彼女はダールを「あるべきところ」に据えられてはいない。彼はロマンティックな「母」に対してだけでなく、そのロマンティシズムを超越した「アディ」に対しても「他者」であり続ける。だからいくら彼女が彼の存在を否認しても、この小説の読者はそうすることはできないの

だ。そしてここで重要なことは、フォークナーがヒロインのロマンティックな企図の不成就を、彼女のグロテスクさの露呈としているだけではないということである。フォークナーは彼女の失敗を、もう1人の主人公が抱える問題の起源としてドラマタイズするのであり、この二重構造が、『死の床』をポリフォニックな小説としているのである。

ダールがアディにとってトラウマ的存在／「他者」であるのと同様、アディはダールにとってトラウマ的存在／「他者」である。彼女が彼を「帳簿の数字」として「象徴化」できないのと同様、Gabriele Schwabが指摘するように、彼は母親を表象するようなイメージを持つことができない（229）。だが、彼はその「他者」を無視できないという点でアディと決定的に異なる。Joseph M. Garrisonは、ダールは「世界が存在して意味を持つためには、世界が彼の意想に適合し、彼に完全に所有されなくてはならないという思い込みにより滅びる」（51）と述べるが、彼の問題はこうしたロマンティックなものではない——彼はロマンティックになる機会そのものを奪われた存在として誕生したのだ。アディは「象徴化の失敗」を自らの目から隠し通すが、彼女の失敗を象徴するダールは、以下に見るように、「他者」との（不可能な）関係から自らを切り離せないのである。

この小説の草稿では、ダールは母親を “Addie Bundren” ではなく “Maw” として紹介していた（Patten 9）。それが現行のように修正されたことは、彼が「母」を「象徴化」できないことの重要性を示唆するように思われる。言語の遂行的な機能に意識的な彼（“The reason you [Dewey Dell] will not say it is, when you say it, even to yourself, you will know it is true” [40]）は、心の中でも彼女を “Maw” と呼べない。ここで銘記しておくべきは、彼の問題を考える際には、「アディ」と彼の「母」を単純に同一視できないということだ。彼が「アディ・バンドレンは死ぬんだ」（39, 40）とか「死んだよ」（52）と述べるとき、彼は「アディ」の死は受け入れたとしても、「母」の死を受け入れているわけではない。家族の他のメンバーと異なり、「母」の代理となるようなもの、つまり「転移」の対象を持たない彼は、母親に対して誰よりも深いオブセッションを抱いているのである。

ダールの「母」へのオブセッションを示す例は頻出する。彼のジュエルへの嫉妬は明白であるし、また、彼がデューイ・デルの妊娠や、ジュエルにとっては馬がアディの代理物であることをすぐ見抜くことと、それらがいずれ

も「母」に関わることであるという事実は無関係ではないだろう（Seltzer 61）。そしてまた、彼はジュエルに彼を "You goddamn lying son of a *bitch*" (213, my italics)と呼ばないように要求する。ジュエルが単に "Goddamn you" (95) と彼にいうときには気にしないにもかかわらず、そして彼らの話題が他ならぬアディの姦通であるにもかかわらず、である。

「俺にはお袋がいないからお袋を愛せない」（95）とダールはいう。この台詞は「母」がいれば「母」を愛せるという意味に解釈し得るし、ひいては彼の「母」を愛したいという願いを示唆するが、重要なことは、まさに「母」を愛したいがゆえに、彼は「アディ」の死を確固たるものにせねばならないということである。彼にとって「アディ」の死は、彼の「母」を愛したいという内的欲望を妨げてくれる外的障害物なのだ。アディが、自分が第二子を愛せないこと（そして「母性」を特権化することに失敗したこと）を自らの目から隠すためにダールを無視したのと同様、ダールは自分が「母」を愛せないこと（そして自分には「お袋がいない」こと）を自らの目から隠すために、「アディ」の死を利用するのである。

アディがダールのことを「ポジティヴな性質において捉えることができない」のと同様、ダールの「母」への愛は、外的障害物が彼の「母」へのアクセスを阻害し、対象が本質的にアクセス不可能であるという事実を隠蔽してくれる限りにおいて可能となる。けれども、繰り返し強調しているように、ダールはアディとは異なる。アディが＜象徴界＞への不信を梃子にしてダールという「他者」を無視／超越するのに対し、ダールは「他者」の "uncanny" な存在を直視せざるを得ない。そう考えてみれば、彼がこの小説における主要な語り手となることはいかにも相応しい。対象への本質的なアクセス不可能性を自分の目から隠そうとしても、この自意識の強い "seer" は自らの「自我」の空虚さに直面せざるを得ないのであり、その空虚な自我を埋めようとする虚しい努力が、彼の頻繁な語りという形となってテクストに浮上するのである。

このように考えてくると、我々はダールによる放火の動機を理解できる。彼は葬送行の目的を消滅させ、自分の「母」を愛したいという欲望における「外的障害」を維持しようとしたのだ。旅行の終結は「母」（家族にとってのアディの役割はこれに他ならない）を弔う「喪の儀式」の完遂を意味するが、「お袋がいない」彼には、「母」が弔われ、「あるべきところ」に収められて忘却されるという事態を受け入れる心の準備はできていない（できない）の

である。

「アディ」の遺体を燃やしてしまうことで、ダールは「母」との繋がりを維持しようとする。葬送行の完遂を阻止できれば、あるいは彼は自分に「お袋がいない」という事実を曖昧なものにできたかも知れない。だが勿論、そうした試みが成功したとしても、それでも彼の「母」との関係における問題は、根本的には未解決のまま残るはずだし、ジュエルによる「母」の遺体の救出は、そうした事実を容赦なくダールに突き付けるものである。自分の母親に全く言及しないアディとは対照的に、ダールは「母／他者」から決して自由になれないのだ（アディが母親について言及しないことは、フォークナーがダールの問題を、他者と——特にアディと——共有できないものとして提示していることを強調するだろう）。

ダールは「アディ」の死を認めることには積極的であり、従って彼の「母」へのオブセッションは、アディの「アディ」たろうとする奮闘と並置され、またすれ違う。彼の問題はアディの問題と根本的に対立するが、アディは自分の問題を超越し、彼を無視して満足できるがゆえに、その２つの問題の関係は非対称的なものになっているのだ。アディが彼を産んだときに計画された葬送行は、この非対称的関係を、彼の悲劇的な袋小路において体現する。彼女はその旅を「母」ではなく「アディ」となるために設定するのであり、彼による「母」の希求は、彼女が「アディ」となろうとする意志に基づく葬送行にポジティヴな位置を持たないのである。

Robert Merrillはアディを悲劇的な人物とするのは単に彼女が他者との交わりを果たせないことではなく、彼女がその交わりを、自分と同じような情熱を抱いている唯一の息子であるダール以外の人間にのみ求めることだと述べるが（410）、これはややミスリーディングな主張だろう。ダールの「母」との（不可能な）交わりを求める情熱は、まさに彼女自身が彼の存在を拒絶するところに起源を持つからである。この２人の主人公の「関係」は、そのトラウマ的な性質のために常に既に発展が阻害されており、望ましくはあっても本質的に不可能なものとしてのみ想像されるものなのである。

バンドレン一家の葬送行は、アディとダールの互いへの他者性を前景化する。アディの「アディ」たろうとする努力は、ダールの「母」を求め、自己のアイデンティティを確立しようとする願いをその起源において挫折させるのであり、そのことは、彼らが抱える個々の問題が、共通の基盤を持たない

ことの証左となる。そして２人が共通の、「弁証法的」な地平に立っていないことが、彼らをこの「対話的」な小説において、それぞれ単独性を持った、主人公に相応しい存在にするのだが、詳しく見ておかねばならないことは、作者がそうしたポリフォニックな性質を損ねずに、小説にテーマ的な統一をもたらしていることである。つまり、この小説の大きなテーマとして、共同体の構成員との関係、より具体的には、構成員の単独性を抑圧する共同体の機能について考えておきたいのである。

ダールと共同体との関係は、アディのそれのほとんど正反対であるといっていい。アディが共同体を拒絶するのに対し、「ダールは共同体を持たない」(Jacobi 71)。アディが、彼女を「母／妻」という役割に閉じこめようとする共同体を、そうした役割を演ずることにより超越するのに対し、ダールは共同体の平和のために、スケープゴートとして施設に入れられてしまう。このように、共同体という主題は２人の主人公の違いを際立たせるのであり、また、２人の違いはその主題の豊かさを引き立てる。ヨクナパトウファという共同体は、ただの静的な地理的空間ではない。それは差異を内包する動的な舞台であり、ポリフォニックな声が互いに混じり合うことなく反響する小説的空間なのだ。

フォークナーの30年代半ばから40年代初頭にかけての傑作群が示すように、ヨクナパトウファとは深くイデオロギー的な世界である。30年代初頭のフォークナーは性差・人種・階級といった様々な差異に対する関心を育て始めていたが、それらが１つの作品で統合されるには*Absalom, Absalom!*を待たねばならなかった。本稿の文脈で重要なことは、『死の床』が、フォークナーが共同体という主題を初めて正面から扱った小説であり、そのような意味において、彼の最高傑作への道筋の先鞭を付けていることである。とりわけ、20年代後半の彼が、貧乏白人を扱った*Father Abraham*を完成し得なかったことを思えば、（フォークナー研究において性差や人種に比べて論じられることが少ない）階級という問題を『死の床』が扱っていることの意義は強調されていいように思われる。

この小説における階級問題は、田舎と都会という共同体の対比という形で遍在する。例えばアンスはアディに求婚するとき、町の人々の目を意識する(“I know how town folks are, but maybe when they talk to me. . . . . .” [171])。また、彼の「道路」への嫌悪感は、John Steinbeck や Erskine Caldwell の作品における時代錯誤のプア・ホワイトを想起させる。ジュエルは “a goddamn town

fellow" (230)と喧嘩しそうになるし、幼いヴァーダマンでさえ「何で僕は町の子供じゃないの」(66) と父に訊ね、社会的身分への自意識を垣間見せる。デューイ・デルは自分達が田舎者で、町の人間ほど立派ではないと考え (60)、葬送行には一張羅を携帯し、(『八月の光』のLena Groveと同様) 町の娘のふりをする。ダールによる「俺は [タル] が作業着を着て町に行くのを見たことがない。奴の女房がそうさせてるらしいが」(11) という観察に、ここで言及しておいてもいいだろう。

こうした登場人物達の階級意識はそれ自体、ライトモチーフ的に反復されて小説を豊かなものにするが、フォークナーはこの社会的テーマをダールのアイデンティティの問題と接続することで深化させる。フォークナーは共同体という主題に、リアリズム的視点からだけではなく、(ポスト) 構造主義的視点から接近するのであり、後者の視点が、他者との関係において「自我」を樹立しようというダールの虚しい努力を、(*The Sound and the Fury*がそうであるような)「母」との精神分析的な関係を超える地平で展開させるのである。

Terrell L. Tebbettsが簡潔にまとめているように、「アディは『自我』には何の問題もない——それはダールの問題なのだ」(89)。言語／<象徴界>への不信によって、アディは自らの自我を超越的なものとして見出し、家父長的南部共同体を拒絶し、社会的慣習に盲目的に従っている (文化的に「去勢」された) 人々から自己を峻別する。だが、こうした彼女の「自己実現」は、彼女の「象徴化の失敗」をまさしく象徴するダールという存在の否認に依存するのであり、この彼女の「帳簿」に載せられていない第二子は、いわばアディの「負債」を体現しつつ、その「負債」を自らの「自我」の問題として負わされることになる。「私」の場に引きこもるアディとは異なり、ダールは「公の場に閉じこめられ、そこを去ることもできないし、そこに属することもできない」(Hale 20) のである。

後年、フォークナーはJ. D. SalingerのHolden Caulfieldに言及して、「彼の悲劇は、彼が人類の一員となろうとするとそこには人類がいなかったということである」(*Faulkner* 244) と述べたが、この評言はダールについても正確に当てはまる。ダールは (ホールデンと同様) 他者とのあいだに繋がりを見出そうとして「自分の周囲の人間や出来事への過敏症的な解釈」(Degenfelder 84) を繰り返す。彼はしばしば1人称複数の代名詞を用い (Fowler 26)、他人とその内側に入り込むような形での接触を持つ (Goellner 49)。だが皮肉な

ことに、こうした努力が露呈させるのは、「自分以外の全ての人間になるのが彼の宿命である」(Bedient 101) ということなのだ。

母親に自我を持つことを許してもらえなかったダールは、他人と繋がりを持とうとすると、自我の欠落を虚しく再確認させられることになる。もともと「お袋がいない」彼は、「母」の「代わり」になる存在を持てる（そして愛せる）はずがないのだ。彼は千里眼を持ち、他者に "empathy" は感じることができても、ほとんど——あるいは一度も——"sympathy" を感じることはない。アディによる彼の存在の否認は、彼の中に根源的な欠落を残すばかりでなく、彼にその欠落を埋められるかも知れないというロマンティックな幻想を持つことさえ不可能にしてしまっているのである。

このようなダールの内的問題を、作者は主人公の個人的問題として完結させるのではなく、他の登場人物達との関係性の中に開いていく。アディと同様、ダールもこの小説における登場人物の１人に過ぎないのであり、彼自身が他者との繋がりを築くことができなくとも、読者は（そして他の登場人物も）彼を他者との関係において見ることになる。例えば彼は突出して頻繁に、内的独白をする語り手として登場するが、この現象は彼の内向的な性格を強調するだけでなく、アディの否認によって生じた欠落を埋めようという彼の虚しい努力を示唆するばかりでもない。それは他の登場人物達に、彼のやっていること——「ひとりで考えすぎる」(71) ——をせずにすむようにさせているのであり (Mathews 233)、その点において彼のスケープゴートとしての運命を象徴的に表象するのである。

登場人物達は、ダールのことを繰り返し "queer" と呼ぶ。我々は彼の「変人性 (queerness)」を「狂気」と簡単に同一視しないように注意すべきだが (Slatoff 164-69)、劣らず重要なことは、その「変人性」や「狂気」をダール個人の心理的問題に簡単に回収すべきではないということである。構造的には、共同体内部の誰かを「変人」と呼ぶことと、「狂人」として共同体外部に放逐することはほとんど同一である。どちらのケースも、共同体は秩序を保つためにその人物を「他者化」(「象徴化」) するのだ。そうして「他者化」された人物は共同体の論理に属する存在に過ぎず、従って、ダールの「変人性」ないし「狂気」を心理的問題に還元してしまうのは、彼を精神病院に送る登場人物達がそうするように、彼の象徴化され得ない他者性を抑圧・隠蔽してしまうことになりかねないのである。

ダールの視線は、人々に自意識を持たせる——「奴の目で人は自分を、自

分の行動を見ている気になる」(125) ——ため、社会的慣習に身を委ねていたい共同体の人々には脅威となる。彼らはダールの目という鏡に映る自分の姿を直視できず、「あいつは他の連中と目を合わせられない」(234) と、鏡が間違っていると主張する。彼らはまず彼のことを「変人」として噂し、後には彼を「狂人」にしてしまう。「狂人」に関して (あるいは「変人」に関しても)、人は "personal" (237) になれないし、なる必要もない。ダールの「狂人」への変化は、彼の「変人」としての他者性に対する共同体の抑圧のグロテスクな発露であり、またそれに過ぎないのだ。

フォークナーは「ダールは最初から頭がおかしかった」(*Faulkner* 110) と後に述べるが、これよりもキャッシュの言を信頼すべきだろう——"Sometimes I aint so sho who's got ere a right to say when a man is crazy and when he aint. . . . It's like it aint so much what a fellow does, but it's the way the majority of folks is looking at him when he does it" (233)。Michel Foucault を引くまでもなく、誰かを「狂人」と呼ぶのは、自分達を「正気」の側に置く共同体的営為である。ダールが「狂人」になるのは共同体の人々がそう決めたからであり、彼らがそうするのは共同体の平和を維持せねばならないからである。

「他にどうしようもなかった」とキャッシュはいう。「奴をジャクソン送りにするか、それともジルスピーに裁判で訴えられるかのどっちかだったんだ」(232)。つまり、彼らに十分な金があれば、ダールは「狂人」になる必要がなかったということである。悲劇的なのは、ダールがそのようにして作られる彼の「狂気」の虚構性を意識しているように思われるばかりか、最後まで共同体のメンバーとして振る舞うことを選択するということである。

> "Do you [Cash] want me to go?" he said.
>
> "It'll be better for you," I said. . . .
>
> "Better," he said. He begun to laugh again. "Better," he said. He couldn't hardly say it for laughing. He sat on the ground . . . laughing and laughing. It was bad. It was bad so. I be durn I could see anything to laugh at. (238)

この場面で、ダールは自分が最も近く感じている兄 (234) に、自分は「狂人」になるべきかどうか訊ね、肯定の答が返ってくると、彼は地面に座って抵抗をやめ、(「狂人」の) 笑いを再開する。そしてキャッシュは、自分の判断は正しいと事後的に確認する。つまりダールは、兄が代表する共同体の期

待に従って振る舞うのである。

ダールの笑いは、彼がポジティヴな関係を結べなかった共同体への最後のコミットメントである。「何も笑うべきものがない」のに笑う「狂人」のパフォーマンスは、この自我の欠落した自意識の強い人物の身振りとして皮肉にも相応しい。彼の笑いは「狂気」の徴となり、共同体の秩序維持に利用されるが、スケープゴートとしての役割をいわば「選択」する彼は、「他者」を抑圧する共同体の論理を超越し、そこに亀裂を残す。この「小説の結末は偽りの秩序回復」でしかない（Bleikasten 50）。ジュエルと町の人間のあいだに仲裁に入った人物を排除することで、一家はバランスを失ってしまう。「バランス」にオブセッションを抱く、共同体を代表するキャッシュが、ダール放逐と同時に、片足が短くなり、一生バランスを失って生きねばならないと診断される（240）ことは偶然ではないだろう。

ダールの「よき狂人」としてのパフォーマンスは、アディの「良妻賢母」としてのそれと似ている。彼の笑いは、彼を「変人／狂人」として（そしてアディを「母」として）「他者化」する象徴秩序を露呈させ、転覆するのだ。だが彼にとって「異常者になることは部分的には逃避」（Wagner 75）などではない。アディは象徴秩序に対する自分の無力を受容し、「他者」を無視して（主観的には）そこから逃げおおせるが、ダールの「狂気」は、彼が「他者」と関係を結ぼうとした結果なのだ。アディと異なり、彼は他者から自己を切り離せず、高みから「自分が逃げ出しつつあるバンドレン家の無知を大声で、長々と笑う」（Roberts 36）ことなどできはしないのだ。

他者から自己を切り離せないがゆえに、この読心術を持つかのように見える男が兄の裏切りを察知できないのも当然だが、最後に指摘しておくべきは、ダールの最後のセクションが、彼の「狂気」を共同体の視点の彼への侵入として提示していることである。

> Darl has gone to Jackson. They put him on the train, laughing, down the long car laughing, the heads turning like the heads of owls when he passed. “What are you laughing at?” I said.
>
> “Yes yes yes yes yes.” . . .
>
> [The Bundren wagon] looks no different from a hundred other wagons there. . . .
>
> Darl is our brother, our brother Darl. Our brother Darl in a cage in Jackson where, his

grimed hands lying light in the quiet interstices, looking out he foams.

"Yes yes yes yes yes yes yes yes." (253-54)

ここでダールは兄弟と「同一化し、彼らの集合的視点が彼のものに取って代わる」(Kleinbard 53)。だがこの視点の変化／簒奪は、もともと「自我」を持たない彼の中の「俺（"I"）」が失われたというより、家族の単独性が失われたことを示すというべきだろう。一家のワゴンは、彼には「百台もの他のワゴンと変わらない」。単独の「俺」がいない世界には、単独の「家族／共同体」もないのだ。

ダールの笑いは、アディの「復讐」と同様に具体的な対象を持たないまま、象徴秩序を転覆させる。共同体の視点を内面化した彼が何を自分が笑っているのかいえないことは、共同体が彼（の笑い）の「象徴化」に失敗していることを示唆する。だが同時に、我々は彼の "yes" を耳にする。スケープゴートとは本来、自分を「他者化」した共同体に "no" を突き付ける存在であり、この "no" が全てを「あるべきところ」に据え、象徴秩序をもたらす（浅田 58-59）。アディによる象徴秩序の超越はこの "no" である（だから『死の床』批評はアディの分析が中心となってきた）が、この "no" は、本稿の冒頭で示唆したように、アディの限界／矛盾でもある。それは結局、共同体のロジックに回収され、その持続に貢献してしまうからだ。

しかしながら、ダールの "yes" は、アディの死角を撃ち、それによって共同体のロジックの根幹を転覆する。「他者」を直視できなかったアディは、彼の「他者化／スケープゴート化」を開始した存在だが、スケープゴートとしての役割を担いながらも "no" という言葉を発することを拒否する彼は、まさに彼女の超越性を強烈に相対化するがゆえに、共同体のバランスを失わせるのだ。そしてこれを逆の観点から見れば、本稿の結論として提出できるだろう。つまり、ダールが「他者」を抑圧する共同体の論理を深いレヴェルで転覆させてくれるおかげで、我々はアディの（南部）共同体／象徴秩序批判を、特権的ヒロインによる超越的なものではなく、１人の女性による超越論的なものとして見る視座を獲得できるのだ。

Temple Drake と Horace Benbow をはじめ、南部共同体のイデオロギーを問題とする30年代のフォークナー作品では「すれ違う男女」が繰り返し登場することになる。そうした奥行きの深い小説のヒロインが魅力的な存在となる１つの理由を、ダールの悲劇は我々に開示してくれるように思われるのであ

る。

引用文献

Bedient, Calvin. "Pride and Nakedness: *As I Lay Dying*." Cox 95-110.

Bleikasten, André. *Faulkner's* As I Lay Dying. Rev. ed. Trans. Roger Little. Bloomington: Indiana UP, 1973.

Cox, Dianne L., ed. *William Faulkner's* As I Lay Dying: *A Critical Casebook*. New York: Garland, 1985.

Degenfelder, E. Pauline. "Yoknapatawpha Baroque: A Stylistic Analysis of *As I Lay Dying*." Cox 63-94.

Faulkner, William. *As I Lay Dying*. 1930. New York: Vintage, 1990

———. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*. Ed. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner. New York: Vintage, 1959.

Fowler, Doreen. *Faulkner: The Return of the Repressed*. 1997. Charlottesville: U of Virginia P, 2000.

Garrison, Joseph M., Jr. "Perception, Language, and Reality in *As I Lay Dying*." Cox 49-62.

Goellner, Jack Gordon. "A Closer Look at *As I Lay Dying*." *Perspective* 7.1 (1954): 42-54.

Hale, Dorothy J. "*As I Lay Dying*'s Heterogeneous Discourse." *Novel* 23 (1989-90): 5-23.

Jacobi, Martin J. "'The Man Who Suffers and the Mind Which Creates': Problems of Poetics in William Faulkner's *As I Lay Dying*." *Southern Literary Journal* 20.1 (1987): 61-73.

Kleinbard, David. "*As I Lay Dying*: Literary Imagination, the Child's Mind, and Mental Illness." *Southern Review* 22 (1986): 51-68.

Lind, Ilse Dusoir. "Faulkner's Women." *The Maker and the Myth: Faulkner and Yoknapatawpha, 1977*. Ed. Evans Harrington and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1978. 89-104.

Mathews, Laura. "Shaping the Life of Man: Darl Bundren as Supplementary Narrator in *As I Lay Dying*." *Journal of Narrative Technique* 16 (1986): 231-45.

Merrill, Robert. "Faulknerian Tragedy: The Example of *As I Lay Dying*." *Mississippi Quarterly* 47 (1994): 403-18.

Patten, Catherine. "The Narrative Design of *As I Lay Dying*." Cox 3-29.

Roberts, J. L. "The Individual and the Family: Faulkner's *As I Lay Dying*." *Arizona Quarterly* 16 (1960): 26-38.

Schwab, Gabriele. "The Multiple Lives of Addie Bundren's Dead Body: On William Faulkner's *As I Lay Dying*." *The Other Perspectives in Gender and Culture: Rewriting Women and Symbolic*. Ed. Juliet Flower MacCannell. New York: Columbia UP, 1990. 209-41.

Seltzer, Leon F. "Narrative Function Vs. Psychopathology: The Problem of Darl in *As I Lay Dying*." *Literature and Psychology* 25 (1975): 49-64.

Slatoff, Walter J. *Quest for Failure: A Study of William Faulkner*. Ithaca: Cornell UP, 1960.

Tebbetts, Terrell L. "The Bundrens in Context: Faulkner's Proprietary Family." *Publications of Arkansas Philological Association* 16.2 (1990): 83-97.

Wagner, Linda Welshimer. "*As I Lay Dying*: Faulkner's All in the Family." *College Literature* 1.2 (1974): 73-82.

Žižek, Slavoj. *The Sublime Object of Ideology*. London: Verso, 1989.

浅田彰『構造と力——記号論を超えて』勁草書房、1983年。